

「身体とスポーツ」

～ 子どもにとってのスポーツを考えるにあたって ～

Body and Sports :

On Thinking about Sports for a Child

平尾 剛*

山根 耕平**

Hirao Tsuyoshi

Yamane Kouhei

現在における子どもにとってのスポーツは、勝利至上を目的とする大人のスポーツの縮図と考えられている。勝利という結果に固執するがあまりに必要な以上の厳しさが強いられ、伸びやかな成長や発達は二の次とされている。この論文では、こうした子どもにとってのスポーツを根底から考え直す前段階として、成長主体である身体に焦点を当てて、スポーツの実体に迫った。本来、スポーツは身体を通して楽しむものであり、様々な学びを得ることができるはずである。大人のスポーツから分離し、教育的な視点から捉えたことにより、子どもにとってのスポーツ像の輪郭が浮かび上がった。

キーワード： 身体 子どもと身体 全体性 スポーツ文化 子どもにとってのスポーツ

はじめに

スポーツは勝ち負けがあるから面白い。それは、スポーツに取り組むにしても観るにしても言えることだろう。飽くなき勝利への挑戦が選手に真剣さをもたらし、そしてそのひたむきさに観ている者は心を奪われる。ICSPE「国際スポーツ・体育評議会」によれば、スポーツは「プレイ（遊び）の性格を持ち、自己または他者との競争、あるいは自然の障害との対決をふくむ運動」とあるように、勝利を得るための競争が、スポーツの持つ魅力の一つであることは言うまでもない。しかし、勝ち負けだけにこだわり過ぎると、達成感や克己心などのスポーツから得られるべき本来の特性をスポイルすることになりかねない。

勝ち負けの問題を抜きにしてスポーツを語ることが難しい現状を、玉木正之はこう指摘する。

「どのチームが優勝し、誰が活躍し……ということだけに話題が集中するばかりで、それらのスポーツが、われわれの社会とどのような関わりがあり、どのような「スポーツ文化」として存在しているのか、ということは、ほとんど語られたことがなかった⁴⁾」。

スポーツ新聞を始めとする各メディアでは、厳しい練習を積み重ねて勝利を掴むという物語に沿った

報道が繰り返されており、勝利を収めたチームもしくは個人が、これでもかと言わんばかりに賞賛を浴びている。勝利に至るまでの練習への取り組み方に焦点を当てるならまだしも、好きな異性のタイプや趣味などの私生活をも含んだ語り口からは、スポーツ選手が商品化の傾向にあることが感じられる。まさにこれは、スポーツが本来持っている文化的な側面から逸脱しつつある現状であろう。

一口にスポーツと言っても解釈には幅がある。スポーツを生業にしているプロの選手ならば、勝たなければならぬ義務を背負うことからスキルの向上が何よりも優先され、常日頃から練習やカラダのケアに取り組むことになる。そこにはどうしても厳しさが伴う。対照的に、仕事をする傍らで健康のために行っているウォーキングやフットサルには、あくまでも快適さが求められる。心地よく行うことによってストレスを取り除き、心身の健康を目的としているのである。

では、子どもにとってのスポーツはどうだろう。コーチが小学生を怒鳴りつけながら指導する光景を目の当たりにし、苦しそうな表情をみせる子どもたちの顔を覗き込むと、どうにもいたたまれない気持ちになる。キラキラと目を輝かせ、疲れなど知らずに時間の経過も忘れて、何事にも無邪気に没頭でき

* 本学大学院教育学専攻生

** 本学大学院教育学専攻教授

るのが子どもの特権であろう。夢中になることで子どもはたくさんそのことを吸収して成長し、大人はその姿をみて自らの時代を顧みる。こうした特権は、遊ぶという行為の中でいかに発揮されるもので、楽しいから遊ぶのであり、楽しくなければ遊ばない。子どもにとってのスポーツとは、楽しむこと自体が目的であると考えてはどうだろう。

子どもが本来持っている特権を剥奪し、指導者自らの価値観を子どもに押しつけるような指導が横行している現在では、子どものスポーツは勝利至上的な大人のスポーツの影響を大きく受けていると言わざるを得ない。大人のスポーツの縮図としてではなく、遊びの要素を取り入れて子どもが楽しめるようにという枠組みで、子どものスポーツは論じられるべきではないだろうか。

以上のような問題意識から、子どものスポーツを問い直してみたい。勝敗に固執することなく、楽しむことを主眼とし、結果的に成長や発達につながるような子どものスポーツを考察するために、まず押さえておきたいのが「身体」という概念である。私たちは近代的な心身二元論を知らず知らずのうちに踏襲している。しかし、心とカラダを切り離して考えることは理路を単純化させるだけであり、「意欲や成長、発達とはどういうことか」という本質にまで迫るには至らないのではないか。意欲的に取り組む姿勢や健やかな成長、発達を根源的に考えるためには、心もカラダも包括したものとして「身体」を捉え直すことが必要であると、私は考える。

本論では、まず成長や発達を目的とする遊びの要素を取り入れた子どものスポーツを具体的に考察する前段階として、身体とスポーツの問題を取りあげる。最初に、人間ならば誰もが例外なく抱え込んでいる「身体」について考察し、次いで、現在の子どものスポーツの手本となっている大人のスポーツ、つまりは近代スポーツについて、その誕生から歴史的背景を含めて論じていく。

1. 子どもと身体

(1) 環境論より先に

心もカラダも目まぐるしく成長していく子どもについて、深谷昌志はこのように述べている。

「体や知識面での成長加速が著しいのと対照的に、心の面での成長遅滞が進んでいる。体は大きく、知識は豊富だが、精神的には幼さを残す。そうしたアンバランスの成長をたどっているのが、現代の子ど

もたちなのである。」⁹⁾

これは、1983年に書かれたものである。テレビやテレビゲーム、インターネットの普及、さらには遊び場の減少が今日ほどは大きな問題として取り上げられていなかった23年前の時点で、すでに子どもの心とカラダのバランスの崩れが指摘されていることは実に興味深い。さらに深谷氏は、「子どもたちの成長がさまがわりを見せ、さまざまな側面から問題の発生をつげる報告に接する。食欲が低下した、朝からあくびのでる子が多い、子どもの背骨が曲がっている、子どもの糖尿病が増加している、つちふまずのない子が目立つ¹⁰⁾」と述べている。少なくとも今よりは伸び伸びと子どもがカラダを使っていたであろう時代において、すでにこのようなかたちで子どもに異変が生じていたのである。こうした指摘からは、子どもにおける心とカラダのアンバランスという問題の本質は、子どもの生活環境の大幅な変化によるものではないと考えられる。すでに23年前に指摘されている、すぐに「疲れた」と訴えたり、背骨が曲がっている子どもは現在においても報告されていることから¹¹⁾、環境の変化がアンバランスな成長やカラダの異変を引き起こした大きな要因であるとは考えにくい。確かに、環境の変化は、あらゆる外的な刺激に感応しながら学んでいく子どもにとっては小さくない問題ではある。しかし、子どもの成長過程における心とカラダのアンバランスを引き起こした主因が、環境の変化によるものであると考えたところで、教育を思索する地平が広がることはない。いや、むしろ狭まってしまうだろう。今や、凶悪犯罪の頻発によって子ども一人だけの外出は制限され、都市化が進むにつれて空き地などのアナーキーな遊び場が減少し、舗装されていない道路を探すのも難しくなった。子どもが伸び伸びと遊びまわることのできる空間も時間も、徐々に減少しつつある。今後も環境が劇的に改善されることは期待できそうもない。すなわち、子どもの心やカラダに起こっている異変の原因を環境の変化に持っていったところで、今後の見通しが明るくなることは見込めないのである。だとするならば、時が流れるとともに遊び場が減り、遊び方自体が変わっていても、また、学校の教育方針が変更になっても、社会情勢により生活環境が変わったとしても、変化し続ける環境に対応できるような主体へと子どもを成長させるにはどうすればよいか、という視点を持って子どもの成

長に向き合うべきだろう。

(2) 心とカラダ

心とカラダの間で揺れ動く子どもたち。外側からの刺激を目一杯吸収しながら成長していく子どもたちにとって、彼らを取り巻く環境が成長を促進させる大きな要素であることに疑う余地はない。だが、子どもの心身を健やかに伸び伸びと育てるために考えなければならない最初の問題は、取り巻く環境についてではなく、あくまでも子ども自身についてである。そこで、まず、主体となる子どもの身体にまなざしを向けることで、揺れ動く心とカラダの問題に迫ってみたいと思う。そもそも、「心」と「カラダ」は「と」で繋ぐように明確に区別して考えていいものなのだろうか。

幼稚園で働く友人から興味深い話を聞いた。夏の頃、芝生の上で裸足になって友達同士が楽しく遊んでいる輪の中に入ろうとせず、裸足になることを極端に嫌がって泣き出してしまう子どもがいたのだという。友達と遊ぶことが何よりも楽しく感じるであろう園児が、裸足になるのが嫌でその機会を自ら放棄してしまっていることに、大きな違和感を覚えてしまった。裸足になる行為は、本来ならば解放感が溢れて心地よいはずなのに、それを不快に感じる。その不快感が、友達同士で遊ぶ楽しみを凌駕してしまう子どもの心の中は、大人が想像もできないような葛藤を繰り返していると、私には思われる。遊びたい気持ちに抗うようにカラダが反応しているとすれば、その子どもは自らの意欲が抑圧されている悲痛な状態であり、大人が早急に手を差し伸べなければならない問題だと言えよう。この園児が抱える問題の原因は、心にあるのだろうか。もしくはカラダにあるのだろうか。

野間俊一は、精神医学の立場から、「彼の思想こそ、私たちに全般的視座を与えてくれる可能性をもっているように思われる⁶⁾」とゲオルグ・グロデックの名を挙げて、次のように述べている。

「彼は「心身医学の父」と呼ばれながらも、彼自身は一度も「心身症」という言葉を用いたことがない。…疾患は、決して「心」が「体」に影響を及ぼすのではなく、両者はそもそも本質的に同じものであり、その個人の生に対して両者が同時に働いて、ある時は健康と呼ばれる状態に、ある時は病気と呼ばれる状態になると考えたのだ。⁶⁾」

グロデックは、自然科学に基づいた近代医学が確

立されつつある19世紀末にドイツでサナトリウムを営んでいた一般開業医で、温浴療法や食餌療法といった従来からの経験療法にこだわりをみせていた。彼のサナトリウムには、癌や結核など慢性疾患を患い、近代医学から治療困難と宣告された多くの患者が、ヨーロッパ中から集まっていたと言われている。心とカラダを区別することなく、両者は本質的に同じものと考えて「全般的視座」から治療を行っていたのである。その彼のもとに、近代医学の範疇では診断が下せない患者が集まっていた事実は実に興味深い。現在においても、近代医学では説明がつかない病や慢性疾患を患う人たちはたくさん存在するし、さらに、診断で特定されなくてもカラダにどこか不調を自覚しながら半ば治療を諦めている人も含めるとなると、かなりの数にのぼるだろう。もしかすると現在の私たちの社会においても、心とカラダを包括した視点からのアプローチが求められていると言えるかもしれない。

カラダに痛みや違和感を感じると心が晴れ晴れとしないという経験は、大人ならば誰しもが一度は身に覚えがあるだろう。ひどい肩こりや腰痛が続くと、その痛みに煩わされて物事を前向きに考えることが難しくなる。逆に、仕事や恋愛などで悩みを抱え込んでしまうと情緒不安定になり、偏頭痛が起こったり神経性胃炎などの症状が表れたりする。このように、心とカラダは密接に絡み合っている問題であり、「本質的に同じものである」ことは、おそらくほとんどの人が身近な経験として自覚している。それと同時に、心とカラダはあたかも対立するものとして捉え、症状の原因をどちらかに特定しようとする習慣が身に付いていることにも、心当たる。西洋思想では、人間の存在を他の生き物の存在と区別するにあたって、心とカラダは常に対置させて考えられてきた。心から切り離されたカラダは物体の一つであると数えられ、だから西洋の科学の歴史では長らく、カラダは機械のモデルに沿って医学や生理学の対象として分析されてきた。

今日、機械論的にカラダを捉えることで発展してきた西洋医学と密接に関わり合いながら、私たちは生きている。カラダの不調や違和感の原因が決して一様なものではないことに薄々気付きながらも、医学に頼るしか方法がないと思込みがちである。だが、果たしてそれでいいのだろうか。自らの身体に起こる様々な現象の究明を第三者的な医者や医学に委ねてしまえば、機械論的なまなざしの前に自らの

身体を差し出すことになって「全般的視座」が消失する。そうならないためには、あくまでも対症療法であると自覚した上で西洋医学には接する必要がある。偏頭痛が心的ストレスを伴うからには、頭痛薬を飲み続けたとしても完治には至らないのであり、その患者の職場や家庭などの生活環境、心理的側面、趣味嗜好や性格に至るまで、あらゆる角度からのアプローチを模索することでしか、根本的な治療にはつながらないのである。

ところで、今日の私たちにとってほぼ習慣化されている機械論的な二元論とは違い、魂とカラダを分けて考える二元論について、中村雄二郎の言葉を以下にまとめてみよう。

心とカラダを区別する見方の発祥を、原始人や古代人以来のものとする説もあるが、あくまでも宗教の起源的形態として考えられただけであり、今日における心身二元論の源泉とは考えにくいものがある。確かに、魂や心が身体の中に生誕と共に住み込み、死を迎えることによって立ち去るという考え方によって、私たちは先祖を祀るようになり、人間は人間になり得た。こうした考えが現在にまで影響を及ぼしていることは認めるにしても、今日における私たちの身体観を支配しているのは、やはりデカルト的な二元論である。現在の私たちが一番強く抱いている身体についての通念は、人類史的な射程で捉えるものではなく、精神と物体とを原理上異なったものとして峻別する近代的な二元論である。⁹⁾

心とカラダが宿っている「身体」について、さらに考察を進めていこう。まずは鷲田清一の言葉から引用する。

「身体はまずは、ひとにとっていのちの座である。見たり、聴いたり、嗅いだり、味わったり、触れたり……といったかたちでいとなまれる知覚や感覚の座である。身体はその意味で、世界との関係をになう、あるいは世界との関係がそこにおいて起こるもっとも基礎的な媒体であるといえる。¹⁰⁾」

一般的に身体的な成長の指標と言えば、身長や体重、筋力に集約される運動能力を指すことが多い。なので、フィジカル的な能力に特化した身体の一側面という意味でこれまで「カラダ」と記述してきたが、私たちは身体があればこそ五感を働かせながら存在しているし、活動しているという、言わば身体性の原点に立ち返って、以降は身体と表記する。目で見て、耳で聴いて、鼻で匂いを嗅ぎ、舌で味わい、手で触れるのは、当たり前だが身体が行う。さ

らには、椅子に座り机に向かって勉強することだって身体がなくてはできない。読む、書く、話す、怒る、喜ぶ、笑う、泣く、悩む、悶える、地団駄を踏む、高揚する、褒める、思考する、食べる、交わる、眠るといった、生の営みにおけるすべての行為を身体が網羅しているのは言うまでもない。こうした感覚を媒体として眼前に広がる世界を立ち上げるための身体。また、広大な世界の中で確実に自分が存在していることに気付かせてくれる身体。それはつまり、生きることに直結しているまさに「いのちの座」として、身体が在ることを示している。

(3) 意識が向かうところ

まさに自分自身と一体である身体を、普段私たちはどのようなかたちで認識しているのだろうか。自分という存在にぴったり寄り添っている身体について、中村雄二郎は次のように述べる。

「通常の状態では私たちは、自分の身体を意識する必要がない。それは軀がよく活動し機能しているからである。しかし私たちは、自分の身体を意識していなくとも、自分の身体を生きている。私たちは身体を持つのではなく、身体を主体となし、身体そのものとして生きている¹¹⁾」

前方から不意にボールが飛んできた場面を想像してみよう。勢いよくこちらに向かってくるボールが視野に入った瞬間に、ぶつかるまいとしてそれをよけようとするのは正常な反応である。こうした反応は、「このままではボールがぶつかるからよけなければならない」、「右によけるか、左によけるか、それともしゃがもうか…」、「どうも左側によけた方が効率がよさそうだ」、「よし、では首だけを左に傾けよう」などと熟考した後に起こるわけではない。熟考している間にも容赦なくボールが自分の方へ向かってくるのだから、ボールを回避するためには反射的に身体が動かなくてはならない。つまり、身体が咄嗟に反応するときは、身体の各部位を意識することはない。

このように、ぶつからないようによけるという一連の動作は、危機を回避するという意味で身体がよく活動し機能している状態と言えよう。ボールを確認してよける瞬間には意識が身体に向かうはずもないのは、こうした例からも明らかである。さらに、何かを見たり聴いたりするときのような静的な場面においても、その都度、目や耳を意識することはない。ただ見えているものを見ているし、聞こえてく

るものを聴いている。そのとき、確実に存在しているはずの目や耳の存在は意識の彼方に追いやられているのである。

日々を生き、活動し、行動しているときの私たちの意識は、自らの身体ではなく世界に向かって働いている。語りかけられる言葉に耳を傾け、思いを表現するために言葉を紡ぎ、目の当たりにした様々な現象に応じて感情が波打ち、思考にふける。ときに身体を目一杯使って走ったり、スポーツをしたりする。こうした生きる営みが、私たちの意識している世界そのものである限りは、身体が思考の地平を形づくっている。この地平を獲得することにより広大な世界の中に屹立する自己が立ち上がり、意識は「…それぞれに特定な見方をそなえた現実的意識、具体的な私の意識⁽¹⁰⁾」となる。この意識こそが、私たちが自覚しているところの「わたし」なのである。

そして、この「わたし」が向かう先、すなわち思考の地平には他者がいて、当然のようにそこには他者の身体がある。

「私たちの意識は、それと自覚せず意識しなくとも、基盤への拡散をとおして身体に自在な活動を与えることができるのである。上手な剣士は相手の出方に応じて進むべきときには進み、退くべきときには退く。このようなしなやかで自在な行動が、さまざまな次元、さまざまな層で可能になるわけだ。働きをとおして、身体を生きる自己が世界に向って、とくに他者との関係のうちに開かれるのである。⁽¹¹⁾」

「わたし」の意識は、世界に向かうと同時に、身体という基盤に拡散される。「進むべきときには進み、退くべきときには退く」というとき、動きのたびに、足を半歩ずらして肩を開こうなどという意識的な思考が伴わないのは、「わたし」の意識が身体全体へ拡散しているからである。だから、手や足や肩などの各部位を具体的に意識することがなくても、身体はしなやかに動く。そうした動きは、他者との関係のうちに開かれる。つまり、他者の存在を覚知し、世界において他者を認め、「わたし」の意識が他者の身体に向かうときに、身体は自在な動きを獲得するのである。

だが、自らの身体を強く意識することも、ときがある。外の世界に向きがち意識としての「わたし」が、自らの身体に向けられるのはいかなるときなのか。鷲田氏は言う。

「身体が意識のなかに現れてくるのは、身体が媒質としてうまくはたらかないときである。そのとき

身体は、まるで意識それじたいの膠着であるかのよう、意識を押しつけてその場を占領する。このように、身体についての言説はつねに「危期」という様相で語りだされる。身体がうまくはたらいっているときは、身体は主題にすらならない⁽¹²⁾」

痛みなどの刺激を伴ったときに私たちは身体存在を意識し、さらにその刺激を切実なものとして感じざるを得なくなって初めて、身体との抜き差ししない関係に否応なく気づかされる。腕を骨折して運動が不自由になったときに、かけがえのない腕の存在が際立つ。目一杯遊び回って全身くたくたに疲れ、身体の内側からだるさやおもさを実感する。受験勉強が思うように捗らないことにイライラすると、机を叩きつけたり参考書を投げつけたくなる衝動に駆られるのも、身体を意識する一つの現れに数えていいだろう。つまり、「身体そのものとして生きている」という実感は、その性質上、程度の差はあっても身体が「危期」的な状況に置かれたときに強く湧いてくるのである。

(4) 子どもにとっての身体

「いのちの座」である身体は、野間氏の言うように「全般的視座」から見つめる必要がある。身体は思考の地平を形づくり、地平を獲得することで広大な世界に自己が立ち上がる。そして、身体を実感するのは痛みなどの刺激を伴ったときである。では、ここまでみてきた身体観を子どもに向けてみよう。このような身体を子どもはどのように生きているのか。

子どもは日に日に成長する。心もカラダもぐんぐん発達していく。カラダが成熟している大人であっても心とカラダの齟齬に悩むのだから、凄まじいスピードで发育しているカラダを子ども自身が持て余すのは当然であろう。カラダの成長と共に心も成長していき、心の成長と共にカラダも成長するわけであり、成長過程において両者はときに葛藤を繰り返しながら育まれる。あくまでも心とカラダは一つの身体に宿っており、成長を続ける子どもの心とカラダは、複雑に絡み合いながら絶えず发育していることを強く念頭に置く必要があるだろう。

目に入るもの、手にとるものなど、自分自身が触れるすべてのものを新鮮に感じ、こうした触れ合いを経験するたびに新しい価値観やものの考え方を身につけていくのが子どもである。子どもにとっての「具体的な私の意識」は、日ごとに変化し続けてい

る。それに、昨日と今日で大きく変わってしまうこともあり得るほどに、子どもの成長速度は早い。そうして絶えず変わり続ける「わたし」を、たとえ意識に上らなくても子ども自身が不安に感じていないはずがないだろう。その不安を解消すべく、子どもは身体への刺激を欲している。そうは考えられないだろうか。

教育現場に目をやってみよう。すぐに「疲れた」と言う子ども、授業中にじっとしてられない子ども、他人とコミュニケーションをとりにくい子どもなど、「ちょっと気になる行動をとる子ども」が増えているという。そういった子どもたちを「学習障害(LD)、注意欠陥/多動性障害(ADHD)」という概念で捉え直して具体的な対応を考えようとする動きが生まれつつある。ハンモックを体育館の天井から吊るして作ったブランコに子どもを乗せ、二人の先生が揺らしたり急に止めたりして、「速度」や「回転」による遠心力や「揺れ」、「衝撃」といった平衡感覚への刺激を作り出す。遊び場が減りつつある日常生活の中では得ることの少ない経験を、子どもの身体に取り入れることで症状が改善される。また、他人に乱暴な行為を働く子どもは、自分の身体に触れられることを嫌がる傾向にあり、そうした子どもには、「ここは肘で、ここは肩で」というように部位を確認しながら、ナイロン製のタワシで擦るようにして刺激を入れてやることで、落ち着きを見せ始めるのだという。⁽¹³⁾

このように、落ち着きがなく、コミュニケーションがうまくとれないといった、従来ならば心の問題として扱われたであろう症状が、身体に刺激を入れてやることにより改善がみられる事実からも、心と区別することなく「全般的視座」を持って身体を考えることがいかに大切であるかが窺えるだろう。そして、速度、回転、揺れ、接触など「危期」の様相を経験することによって意識が身体に向き、子どもの中の「わたし」が身体を実感する。「いのちの座」として自分を取り巻いている世界と繋がり、他者との接触を歓迎する身体は、その存在が脅かされる「危期」的状況に放り込まれたときに輪郭がはっきりする。誤解を恐れずに言うならば、痛みを伴ったときに自らの身体を意識し、世界との関係が起る基礎的な媒体を実感することによって自己が確立していくのである。ならば、成長途上にある子どもは、身体を意識する経験を繰り返しながら、社会の成員としての大人へ成長していくのだと言えよう。注意

深く子どもを見ていると、急に駆け出したり、高いところから飛び降りたり、落ちていた石を蹴ったり、横断歩道の白い部分だけを通して渡ろうと試みたり、常に動き回りたいとうずうずしているように映る。こうした行動は、刺激を求める身体からの欲求に対して素直に従っている、とは考えられないだろうか。変わり続ける自分自身への不安を抱き、未だ実感に乏しい身体を何とかして感じようとする衝動からくる行動であるとするならば、身体を通じる行為は、子どもにとって自己を確立していくための大切な通過儀礼と考えることもできる。

「これまで愛情や心の問題として語ってきたことも、身体や五感の変化の中で起こったことかもしれない……。心理的な面ばかりを重視して、身体や感覚を大事なものとしてとらえることが、私たちの社会では足りなくなったという感じがしました。⁽¹⁴⁾」

山下柚実が言うように、現在の社会では身体をみつめるまなざしが単純化している。早く走れないのはカラダに問題があり、コミュニケーションがうまくとれないのは心の問題であると、私たちは知らず知らずのうちに解釈して判断している。大人である私たちが、こうしたまなざしで子どもをみつめることによって、彼らを袋小路へと追いやり、深く傷つけているのではないだろうか。私たち自身が生きている身体は「いのちの座」であり、存在そのものである。存在は分節できるはずもなく、これ以上分かつことのできない最小単位である。ならば、心とカラダを明確に区別してみつめることは、存在を引き裂くようにしてみつめるまなざしであると捉えても何ら大げさではないだろう。まずは「全般的視座」に立ち、存在を包み込むようなまなざしで子どもをみつめることが必要ではないだろうか。

2. スポーツそのものについて考える

(1) 低年齢化の問題

子どもの成長を考える上で、最初に環境論を論じては教育を思索する地平を狭めてしまうと先に述べた。それはつまり、環境の変化というものが、子どもの成長に悪影響を及ぼしている最たる要因であると短絡的に考えることへの危惧でもあった。まずは子どもの身体に何が起っているのかを探ろうという姿勢を持ち、その本質を見極めようとするまなざしなくして、子どもを取り巻く環境について論じたとしても、環境が刻一刻と悪化を辿る以上、所詮は空論になる。しかし、だからといって環境が子ども

に与える大きな影響を看過することは断じてできない。痛みや刺激により身体が成長することを考えれば、多種多様な刺激を与えてくれる環境のあり方は、著しい成長を続ける子どもにとって非常に重要であると言わざるを得ないからである。

子どもを取り巻く環境の一つに、スポーツへの取り組みが挙げられよう。小学校に上がる前から習い事として水泳やサッカーを行うのも珍しくなく、小学校に入ってからもリトルリーグ、Jリーグの下部チームやラグビースクールなどに所属してスポーツに取り組んでいる子どもは多い。将来的にあわよくばプロ選手にと願う親もいたりして、子どもとスポーツは密接な関係にある。

こうしたスポーツの低年齢化に、山根耕平は警鐘を鳴らす。

「…大人のスポーツがそのまま子どものスポーツになっているために、子どものスポーツ指導で子どもの心身の発達特性が考慮されていない場合が多い。子どもはいわゆる「小さな大人」ではない。¹⁵⁾」

早い時期から特定のスポーツのみを集中的に行うことの弊害である「野球ひじ」や「水泳肩」、また、過度の競争に身を投じることによって生じたストレスなどが原因で起こる「バーンアウト症候群」を例に挙げ、大人のスポーツの縮図として子どものスポーツが考えられていることに疑問を呈している。

こう考えると、子どものスポーツは何を目的として誰のためにあるのか、という問いに向き合うとき、そもそも大人のスポーツとは何であるかを充分に把握できていないことに気付く。大人たちが躍起になって観たり行ったりしているスポーツを把握しないままに、子どものスポーツを構築したところで砂上の楼閣になろう。そこで、スポーツとは何かについて考えてみる。

(2) メディア越しのスポーツ

「もはやスポーツは純粋な遊戯として社会的な諸関係から孤立しているわけではないからである。スポーツは人びとが日常の社会生活で抱えている歪んだ感情、群集心理から生じる行為、極端なナショナリズムからも免れてはいないし、いまでは完全にメディアに組み込まれていることも否定できないのである。¹⁶⁾」と多木浩二が述べるように、今日、私たちの目に映るスポーツは、そのほとんどがメディアを通じて伝わってくる。日常生活における様々な事柄を、スポーツに置き換えて解決しようとする慣習は至る

ところで散見され、勝負事は勝たねばならないという一つの思考も、勝敗を決することから逃れられないスポーツがもたらした勝利至上主義の影響を受けていると言えよう。国家の威信を懸けた戦いと称したオリンピックにおいて、挙ってメダル獲得数を競い合うのはナショナリズム以外の何ものでもないし、大リーグに挑戦したり、ゴルフツアーで世界中を飛び回ったり、ナショナルチームに所属して国同士の試合に臨んだりして、比較的容易に国家という枠を飛び越えることができるのも、グローバル化が進む世界情勢とスポーツが密接な関係を結んでいることの証左である。このようにして社会的な諸関係と複雑に絡み合っているスポーツに、私たちは主にメディアを通して触れている。ここまで話を広げなくとも、「阪神タイガースが勝ったかどうか」や「浅田真央の滑りはどうだったのか」など、スポーツを娯楽として楽しむためのトピックスですら、私たちはメディアを通して知っているに過ぎない。

私たちが目にするスポーツは、メディアによる恣意的な影響を受けている。本来ならば、一試合、一シーズンという文脈の中で楽しむべきスポーツを、時間の限られたニュースで、また活字制限のある紙面上で編集され、勝敗という結果に限りなく収縮されて、私たちのもとに届けられる。これが、私たちの身近にあるスポーツの正体である。作られた物語をなぞらえることでスポーツをよく知っていると同錯覚しているだけであり、実のところ、私たちはスポーツをよくは知らないのである。スポーツを詳しく知る上でも、まずはその歴史から探ってみる。

(3) スポーツの起こり

産業革命後のイギリスに始まり、経済的にもっとも進んだ国であった19世紀のイギリスにて、富めるブルジョワジーが優雅に余暇を過ごすためにスポーツは発明されたという説明がなされることが少なくない。この説明に対して、「スポーツは労働ではないが、社会的に余分なものではなく、その時代の人間的活動全体との関連のなかで生じたひとつの活動形式ではないのか¹⁷⁾」と多木氏が問いかけるのは、イギリス初期の資本主義、植民地主義を担っていたのは、産業ブルジョワジーではなく地主階級のジェントルマンであり、さらに生活と労働が密接に結びついていた傍らで、実利的ではない余暇の過ごし方として、細かなルールを決めるなどしてこれほどまでに手の込んだスポーツが発明されたとは考えにく

いからである。当時の時代背景が、「ジェントルマンが政治から余暇にいたるひろい社会領域を非暴力的なゲームにする歴史的な段階にさしかかっていた⁽¹⁸⁾」ことを考慮すれば、のんびりと余暇に時間を費やしていたとも思えず、つまりのところスポーツは、支配階級が内乱や革命などの暴力による権力争いを抑制するための装置として考え出され、その目指すところは国内の政治的な安定だったのではないかというのである。

これとは視点を異にした見方もある。産業革命によって次々と機械化が進められる社会では、過酷な労働を強いられる労働者によるラッドライト運動（機械打ち壊し運動）と連動してスポーツが行われていた。それは、「機械化（人工化）」に対する「身体（自然）」を用いた抵抗と見ることができる。⁽¹⁹⁾ すなわちスポーツは、「より「人工化」する社会のなかでの「自然」（身体）を求める行為でもあった⁽²⁰⁾」のである。

資本主義経済が推し進められる流れの中で、労働に縛られつつある身近な自然としての身体を取り戻すという、おそらく人間にとっての根源的な欲望のもとでスポーツが行われていたというのは、実に興味深いところなのだが、ここではこれ以上深入りしないでおこう。スポーツの起こりが「人間的活動全体との関連のなかで生じたひとつの活動形式」であることと、大衆にとって「身体を求める行為」であったことを踏まえて先に進みたい。

（4）日本における発展史

そのスポーツが日本に伝わったのは明治維新後、19世紀の終わりである。長らく鎖国を保っていた日本は、植民地化が進む当時の世界と比較してみても平和な国の一つであった。当時の日本国民は、陽気で笑いが絶えず、裕福ではないものの質素ながら人情味溢れる豊かな生活を送っており、しかも目新しいものへの好奇心が旺盛であった。初めて見かける外国人にも警戒心を持たずに親近感をもって近づいていたという、現在からは想像もつかないほどの愛嬌を持ち合わせていたのは、長らく平和な江戸時代を過ごすことによって培われた国民性だろう⁽²¹⁾。民族同士の争いや、産業革命による社会情勢の急劇な変化の渦中にあったイギリスとは対照的な日本に、スポーツは降り立った。

イギリス社会の内側で役割を与えられていたスポーツに対して、当時の日本はどのように受け入れたの

か。当時の官僚や政府は、近代化を目指す過程において身体を鍛える「体育」としてスポーツを解釈し、富国強兵のスローガンと結びついて発展していくことになる。平穩無事な世の中でしなやかさを内包していた身体を、軍隊としての規律ある身体に鍛え上げるための手段として、スポーツは捉えられたのである。その名残りが小中学生の体力測定に残っており、「ソフトボール投げというのは、戦前の手榴弾投げに代わるものであり、懸垂は、戦前の軍隊が用いていた三八式歩兵銃を扱うためには、自己の体重を持ち上げる腕力を身につけさせるという軍事教練の基本から生まれたもの⁽²²⁾」である。また、「鉄棒の逆上がりを小学生の体育教育に取り入れているのも、同じ理由によるものだった。⁽²³⁾」。イギリス国民にとっては、機械化に抗うようにして「身体を求める行為」だったのに対して、日本国民にとっては「身体を加工する行為」だったのである。こう考えれば、昨今にみられる武術的な身体運用を見直す様々なムーブメントは、長年に渡って続いている抑圧に対して、本来のあるべき身体を取り戻そうとする欲望が表出した行為であると言えなくもない。ならば、これからのスポーツの発展は身体の本質に根ざして考えてみるのも面白い。

戦後に入ると、国民を統制するという政治的な側面を備えたスポーツは、その傾向をより色濃く深めていくこととなる。

日本を占領したアメリカ軍のGHQ（連合軍総司令部）は、「民主主義的な行動の経験」としてスポーツを推奨する。あくまでもスポーツを国家統治における政治的な手段とする見方は変わらず、それは1960年の安保騒動のときに露呈する。日米安全保障条約の改定に反対する何万人ものデモ隊が国会や首相官邸を取り囲んだとき、当時の内閣総理大臣である岸信介は、「善良な国民は、後樂園で巨人阪神戦を楽しんでいる」と口にしたのである。

「日本の政府官僚は、スポーツを、現実社会から目をそらし、現状を肯定し、愛国心を煽り、現体制を守る道具として機能するものにとらえつづけたのである。⁽²⁴⁾」。

玉木氏が指摘する通り、国民一人一人の身体を加工した後は、国民全体の統制の手段にスポーツが用いられた。イギリスにおいて、支配階級が内乱や革命などの権力争いを非暴力化するために考え出されたとされるスポーツは、内乱や革命などとは無縁であった日本においては、今日まで、国民を統治する

ための手段として発展してきたとみなしても差し支えないだろう。地域スポーツとしてではなく、企業スポーツや学校スポーツという日本独特の形態で発展したことから、イギリスを始めとする諸外国とは違った日本におけるスポーツ文化の独自性を垣間見ることができる。

(5) 子どもにとってのスポーツへと

現在の日本におけるスポーツ文化にはこうした歴史がある。いや、スポーツ文化と呼べるほどのものであるかどうかは、「明治時代に欧米からスポーツが流入して以来、日本では、長いあいだスポーツが「文化」とは見なされなかった⁽²⁵⁾」という玉木氏の指摘からも心許ない。何より、中学高校におけるクラブが文化部和運動部に大別されている事実が、スポーツと文化が相対するものとして扱われてきたことの証である。アマチュアリズムへの過度の礼讃によって学生スポーツが盛んに行われ、戦後経済の復興策として育成を最優先された大企業がスポーツチームを抱えるという、欧米に比べて特異な土壌を持つ日本では、スポーツの起源とは大きくかけ離れた形で今日まで発展してきた。当時のイギリスにおいても、日本においても、スポーツが手段だったことは否めない。しかし、非暴力化による政治的安定や身体の奪還をスポーツに託そうと試みたイギリス国内とは違い、日本では「現実社会から目を逸らし、現状を肯定し、愛国心を煽り、現体制を守る道具として」、国家によりその都度巧みに利用されてきたとは言えないだろうか。それはおそらく、イギリスにおいて多民族間の衝突という暴力を回避するために発達したスポーツというものを、ほとんど内乱のない時代を過ごしてきた単一民族国家である日本が、その意味をほとんど深く考えることなく受け入れてしまったことに起因している。

社会的な諸関係から孤立することなく、もはや複雑に絡み合っている今日のスポーツではあるが、その有り様を問い直さずして今後の発展は期待できないだろう。子どもにとってのスポーツを考え直すことも、また難しいと言える。例えば、勝利至上主義を考えると、明治維新後に流入してきたスポーツが、企業スポーツや学校スポーツとして日本に浸透していった歴史的事実を踏まえておかななくてはならない。企業スポーツや学校スポーツの存在意義には企業や学校の宣伝が織り込まれており、勝利することで広く世間に知られるだろうという企業や学校側

の期待の高まりが外圧として働く。所属母体からの期待という外圧を一身に背負う指導者は、知らず知らずのうちに企業や学校からのプレッシャーを感じるようになり、さらには指導者としての名声を得るために自らの虚栄心にも火が付く。このような指導者は、本人に応じた人間的な成長を促す指導より、勝利をもたらす選手に仕立てあげるべく効率的な指導を無意識に優先してしまい、ときに罵声や怒号まで飛び交うような高圧的な指導を行いがちになるのである。こうして、指導者や所属母体からの外圧が、勝利しなければならないという悲壮感を選手に感じさせることになる。このような状態で試合を楽しむことの難しさは、各大会で敗者が悲痛な顔を浮かべたり、項垂れたりしているのを見れば一目瞭然であろう。さらに、「スポーツには、勝者がいれば必ず敗者がいる。そして、常に、敗者のほうが勝者よりも多い。敗北のほうが勝利よりも多い。その敗北という結果を素直に認めない「勝利至上主義」を唱えるひとびとは、スポーツを楽しむ資格のないひとびとというほかないのである。」⁽²⁶⁾という、当たり前のようにも思える玉木氏の言葉を真摯に受け止めることで、勝利至上主義がもたらす害悪について語り始めることができるのである。

ここまで、私たちの目に触れる大半のスポーツはメディアを通じたものであることから始めて、イギリスの支配階級に起源をみるスポーツが日本でどのように発展してきたのかを辿ってきた。こうしてみると、国民を統治するという意図的な目的を携えて今日まで発展してきたスポーツと、子どもにとってのスポーツの間には、根本的な本質の違いが存在しているのは明白であると思われる。成長や発達を最優先に考える子どもにとってのスポーツには、まず楽しむことが求められなければならない。楽しければ時間を忘れて没頭することができ、そうして集中力をいかに発揮できる場を経験することで、子どもは成長する。明確な目的を掲げることなくスポーツを楽しむこと、それ自体でスポーツがスポーツたり得るならば、「教育は成長することと全く一体のものであり、それはそれ自体を超えるいかなる目的ももたない⁽²⁷⁾」というデューイの言葉の、教育をスポーツに置き換えたとしても何ら意味は変わらない。このように、スポーツのあり方を根源的にみつめ直したことによって、デューイの教育観をスポーツに求めることも可能なのではないかと目論むこともできるようになった。ここでようやく、私たちは

子どもにとってのスポーツについて思索を巡らすことのできる、端緒を開いたのである。

おわりに

子どもにとってのスポーツは、これまでほとんど語られてこなかった。そのことを踏まえ、子どものスポーツを改めて考えるにあたって、本論では身体とスポーツを取りあげて論じようと試みた。従来のスポーツカテゴリーから切り離して子どもにとってのスポーツを考える土台を築こうと、成長や発達を第一目的にする点から「身体」を捉え、「スポーツ」そのものを問い直すという、根源的な相への切り込みとなったが、具体的な実践につながるような水準にまで引き上げるには、さらなる研究が必要となる。今後は、構築させるべく実践的なメソッドを視野に入れながら、身体論を深めていきたいと思っている。

【註】

- (1) 玉木正之『スポーツとは何か』講談社現代新書、1999. p.9
- (2) 深谷昌志『孤立化する子どもたち』日本放送出版協会、1983. p.11
- (3) 同上書. p.11
- (4) 子どものからだと心・連絡会議編『子どものからだと心 白書2006』ブックハウスHD、2006. pp.84-85
- (5) 野間俊一『身体の哲学—精神医学からのアプローチ』講談社選書メチエ、2006. p.28

- (6) 同上書. p.40
- (7) 中村雄二郎『哲学の現在』岩波新書、1977. pp.94-95
- (8) 驚田清一編『身体をめぐるレッスン1—夢みる身体』岩波書店、2006. p.ix
- (9) 中村雄二郎 前掲書. p.98
- (10) 同上書. p.98
- (11) 同上書. p.98
- (12) 驚田清一編 前掲書. p.viii-ix
- (13) 斎藤孝、山下柚実『「五感力」を育てる』中公新書ラクレ、2002. pp.33-44ページ
- (14) 同上書. p.83
- (15) 山根耕平「子どものスポーツと遊び」親和女子大学『児童教育学研究』第10号、1991. p.30
- (16) 多木浩二『スポーツを考える—身体、資本、ナショナリズム』ちくま新書、1995. p.22
- (17) 同上書. p.27
- (18) 同上書. p.27
- (19) 玉木正之、前掲書. p.92
- (20) 同上書. p.92
- (21) 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社、2005. pp.74-144
- (22) 玉木正之、前掲書. p.160
- (23) 同上書. p.160
- (24) 同上書. p.158
- (25) 同上書. p.184
- (26) 同上書. p.125
- (27) J.デューイ、松野安男『民主主義と教育(上)』岩波文庫、1975. p.92